

インクル

第34号 2005(平成17)年1月25日

"Incl." by The Accessible Design Foundation of Japan (The Kyoyo-Hin Foundation)
共生社会の実現を願う妖精「インクル」 「包括的教育理念」を意味する英語「インクルージョン」から名付けました

謹賀新年



■カセットテープやCDに入った「音のカタログ」「音のガイドブック」は、視覚に障害のある人にも役立つ情報ツール。現在では玩具、化粧品、電子機器などの商品カタログや取扱説明書、テーマパークのガイドブックなどが発行されています。

イラスト：牧内 智子

目次 / Contents

<年頭挨拶>環境との調和めざし、共同研究体制の構築を (鴨志田厚子).....	2
<特集>ドイツ訪問レポート.....	3
世界最大の福祉機器展「REHA」に2度目の出展、共感広がる共用品コンセプト (森川美和)	
ペーテル〜障害のある人々に寄り添う町〜を訪ねて (山本修).....	5
東京で「第3回東北亜標準化協力セミナー」開催、韓国UD展では共用品を紹介 (星川安之).....	7
第6回西日本国際福祉機器展に出展 (山本修).....	9
随想 私と共用品 第14回.....	10
「情報の橋渡し」を公共サインに託して (児山啓一)	
第2回ADFシンポジウム開催、配慮施策の現状と今後を探る (高嶋健夫).....	11
<ニュース&トピックス>.....	12
内閣府、「平成16年度バリアフリー化推進功労者表彰」を決定 (高嶋健夫)	
ライオン、「さわってわかる歯みがきの本」を発行/自工会、2004年版福祉車輦ガイドブック「ともに道をひらく」発行 (高嶋健夫).....	13
キーワードで考える共用品講座 第33講.....	14
「数字で見るバリアフリー (第1回：0～9)」(後藤芳一)	
<事務局長だより>真の「キャッチャー」であるために (星川安之).....	15
共用品通信・情報アラカルト	
わが社のエース：大日本印刷「ハートフィット・カートン」シリーズ (高嶋健夫).....	16
奥付	

《年頭ご挨拶》

環境との調和めざし、共同研究体制の構築を

勸共用品推進機構理事長 かもしだあつこ 嶋志田厚子

2005年、明けましておめでとうございます。昨年は悲しいほどの異常気象や災害、異常な事件が数多く重なりましたが、皆様にはご健勝にお過ごしのことと存じます。その一方で、アテネ五輪での日本選手の快挙には国中が沸き、「新しい日本の力」を喜び、未来に夢を描けた年でもありました。

勸共用品推進機構も皆様のご支援の下で、大変順調に成長を致しております。すでにご案内のように、展示会への参加では、国際福祉機器展をはじめ、国内各地での出展協力、さらにはドイツ「REHA」展、韓国UD展と、共用品・共用サービスの理念普及活動ではそれぞれに大きな成果を挙げることができました。

なかには、新たなビジネス展開に通じるような反響が得られることも多かった様子であります。来場者の質問や意向を分析して、さらなる大きな果実に育てていくことが重要です。世界中の人々や社会の共通性、個別性、対照性など、これからのグローバルな共用品に大変重要な要素になるであろうと思われ、それは「新しいコミュニケーション」の楽しいポイント作りになってくると確信しています。できれば、当機構の課題に組み込みたい事柄の1つに思っています。

バリアフリーも、ユニバーサルデザイン(UD)も、アクセシブルデザインも、共用品も、根本はこの点を理解し、対応ができればよいということではないでしょうか。共用品推進機構は6年間、生活者のため、社会のため、企業利益のためと、意識を高める活動をして参りました。そして、高い評価もいただいて参りました。

けれども今、それどころではない事態が発生しています。まるで地球環境から逆襲を受けたかのようです。エコデザイン、環境保護の考え方は着実に浸透し、法律の整備も進められていますが、さらに緊急の対応が求められています。

共用品開発は、最終的にはこの環境問題と交わ

ります。機構発足当初の1999年に銀座で開催した共用品展で、その関係図をパネルで訴えていたことが思い出されます。身近な優しさ、親切は私たちに直接できる大切なことですが、ときどき大きく眼を開いて、広い視界と原点を見据えてみる必要があるのではないのでしょうか。

最近よく新聞の紙面をにぎわしている「企業の社会的責任(CSR)」も同軸で考えられると思います。連日のようにテレビで放映されるスマトラ沖大地震・大津波の情景を目の当たりにしながら、緊張感を高めざるを得ません。バリアフリーや共用品を考える時、私たちは果たして、災害発生時のことを正面から考えてきたであろうか、と。

取り組まねばならない問題は山積しています。他組織との、あるいは機構の個人・法人賛助会員相互の共同研究に本格的に着手すべき時期を迎えています。バリアフリーやUDに取り組んでいるグループや研究所が数多く立ち上がってきました。地方自治体もそれぞれに動き始めています。しかしながら、いまだ相互の協力体制は十分とは言えない状況であり、これらをコーディネートすれば有効な形が出来るはずだ、とも思っております。

去る12月19日に静岡県でユニバーサルデザイン大会が開かれ、シンポジウムには知事も参加され、地方自治体ではUDのトップを走っている旨、事例を交えて強調されておられました。私もパネリストの1人として参加し、「モノづくりとUD」のテーマで発言させていただき、使用者の観察、アジャスト設計の必要性、モニタリングの繰り返しなどのポイントを述べて参りました。同時期に熊本県でも知事出席による大会が開かれたと聞き、興味深く思い、今年はさらに多くの自治体取り組みを推進されることを期待したいと存じます。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。



<特集>ドイツ訪問レポート

世界最大の福祉機器展「REHA」に2度目の出展

来場者3倍増、ドイツでも共感広がる共用品コンセプト

昨年11月10～13日にドイツ・デュッセルドルフで「REHA CARE INTERNATIONAL 2004」が開催された。同展はリハビリテーション、福祉・介護機器の関係では世界一の規模と内容を誇る専門見本市であり、他の展示会と同じように各メーカーからの商品が多数展示されると同時に、福祉団体などのインフォメーションブースが多いことも特徴である。

第15回目を迎える同展において、勸共用品推進機構は日本の福祉機器メーカー、日本貿易振興機構(JETRO)、日本福祉用具・生活支援用具協会(JASPA)と共に、2年目の出展を行った。

本年度は参加初年度だった昨年とほぼ同数の34点の共用品を展示し、昨年度の来場者調査の結果を踏まえ、来場者の属性が主にドイツ語圏である点を考慮し、パネルや製品紹介タグの文章をすべてドイツ語で表記した。また、英語圏からの来場者(昨年度は25%程度)にも配慮し、英語版パンフレット・製品紹介タグも併せて作成した。

来場者にアンケート調査、102人が回答

昨年度は、ヨーロッパ諸国からの来場者を中心に日本の共用品の配慮を知っていただくよい機会となり、来場された方々を対象に実施した共用品に関する意識調査によると、9割以上の人に共用品の配慮

についてご理解いただいたという結果が出た(初年度調査の詳細については本誌第27号を参照)。

今年度の調査では、昨年度、共用品の代表例として紹介した①電話の5番の上の凸、②シャンプー容器の刻み(ギザギザ)、③ビールやワイン容器の点字——の3点について、認識度がどの程度アップしたかを調べ、さらに共用品の必要性について来場者の意識を探った。ここでは、調査結果の一部を紹介する。読者が今後の共用品の普及・啓発を検討する際に、参考にいただければ幸いである。

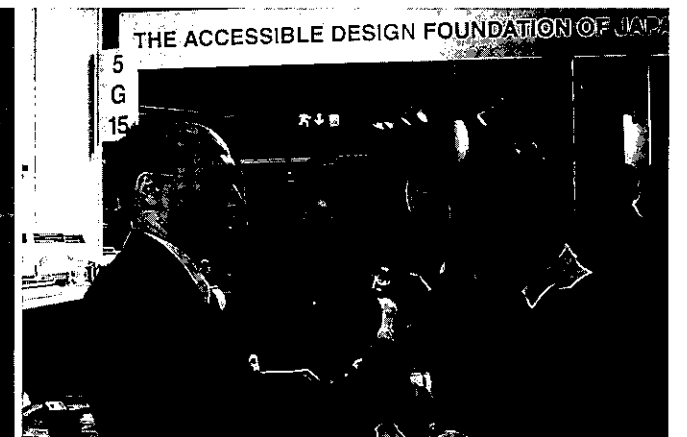
アンケート調査は4日間の期間中、共用品推進機構ブース来場者に任意に記入していただき、回収・集計した。回答者は一般の消費者、障害のある人、福祉施設や研究機関に従事している人たちで、102件を回収した。回答者の属性は以下のとおり。

【居住地】回答者の約80%がドイツ在住。他に、イタリア、ベルギー、フランス、ギリシャ、オランダ、ポルトガル、イギリス、デンマーク、スイス、トルコ、中国、台湾などの在住者より回答があった。

【性別】回答者の60%が女性で、28%が男性である。夫婦、親子、会社関係者など2～5人程度のグループで来られた場合は、女性が代表して記入するケースが多く、そのため、回答率としては女性のほうが多かったが、実際の来場者の男女比はほとん



REHA展におけるジャパンブースの全景



来場者に共用品を説明する事務局・山本修さん(左)

ど同じであったと思われる。

【年齢構成】20歳代が43%と最も関心が高く、続いて30歳代の20%、40歳代の16%となっている。昨年度も若年齢層の来場者が多く、関心が高いが、51歳以上の来場者は全体的にも少ない。51歳以上の年齢層へのプロモーションと認知を高めるためのアクションが必要であると思われる。

9割が共用品を理解も、商品普及はまだまだ

アンケート集計結果を、主な質問ごとに詳しく見ていこう。

Q：高齢者や障害者の不便さや共用品の考え方についてご理解いただけましたか？

「とても理解できた」が45%、「だいたい理解できた」が46%と、高齢者や障害者の不便さや共用品の考え方について、来場者の9割以上の人にご理解いただけたものと思われる。

Q：当ブースで展示した共用品のうち、以前からご存知のものをチェックしてください。

1. 「電話の5番の凸」
2. 「シャンプー容器の刻み」
3. 「ビールやワイン容器の点字」

昨年度調査では、共用品の代表例とも言える「電話の5番の凸」「シャンプー容器の刻み」「ビールやワイン容器の点字」などの配慮のある製品の認知については、来場者の80%が認知していなかった。しかし今年度は、「電話の5番の凸」については102人中48人と半数近くの人が認知しているとの結果が出た。ただし、凸点の配慮の意味については、ほとんどの人が知らなかったと答えている。

「シャンプーの刻み」に関しては、知っていたのは102人中10人にとどまった。ドイツ国内で売られているシャンプーにはギザギザが付いていないため（日本製のシャンプーも含む）、日常生活の中で気づくことは難しいと思われる。

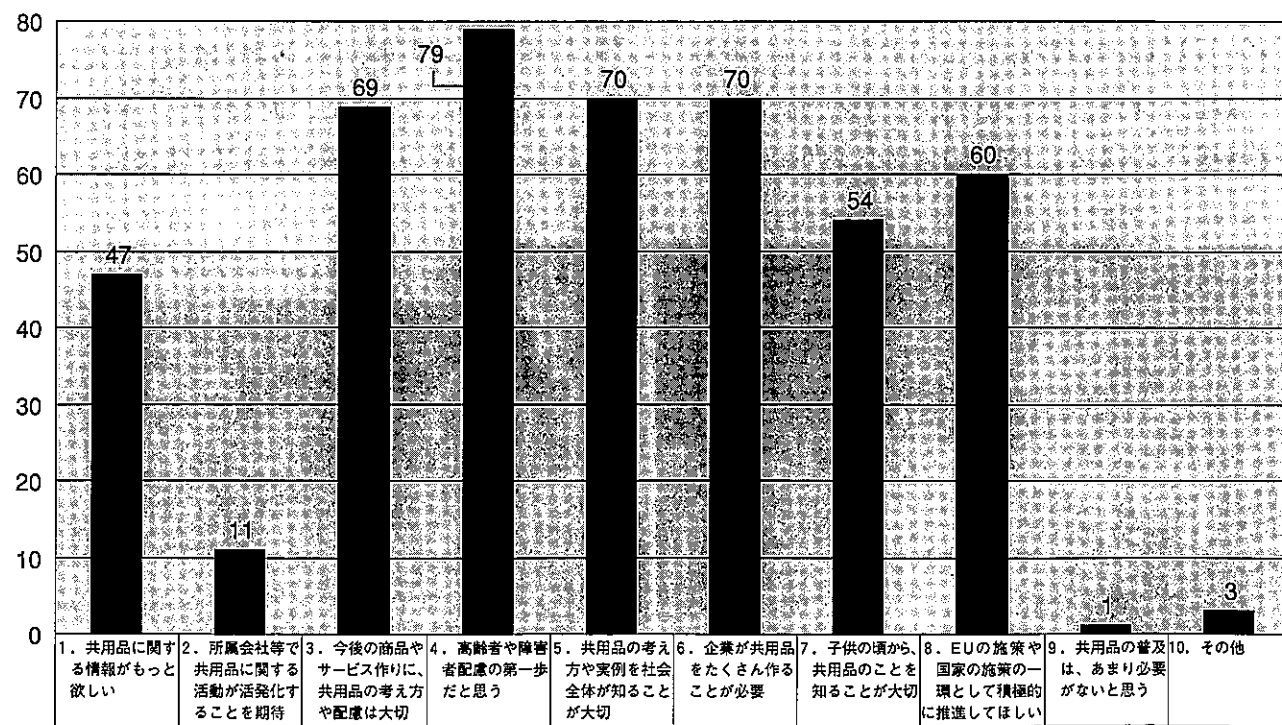
缶ビールの点字についても同様で、知っていたのは102人中27人。同国内で点字付きのビール缶が販売されていないため、認知度はあまり高くない。

また、3点とも「全く知らない」という人が、102人中38人いた（複数回答あり）。

Q：あなたが共用品の取り組みに関して持たれたお気持ちについて、下記よりあてはまるものを、いくつでも選んで○をしてください。（複数回答）

回答結果は別掲のグラフのとおり。昨年度調査で

■共用品の取り組みに対する感想・意見（複数回答）



は、「共用品の普及は、高齢者や障害者など皆が共に理解しあい、生きる喜びを共有する社会への第一歩だと思う」、「共用品の考え方や事例を社会全体が知ることになることが大切だと思う」という2項目に対して高い回答を得た。

今回もこれら2項目に対しては高い回答を得たが、さらに「これからの商品やサービス作りに、共用品の考え方や配慮は大切な要素だと思う」、「企業が共用品をたくさん作る必要があると思う」という項目にも高い回答を得ている。

「私も作りたい」「環境にも配慮を」など反響続々

アンケートではさらに自由回答欄を設け、共用品に関する意見をうかがった。主な自由回答、意見は以下のとおりである（カッコ内は回答者の居住地）。

- ・心地よい学校にするための必要な情報がほしい（ドイツ・エッセン）
- ・子供のためのきれいな商品があるとよい（ドイツ）
- ・身体障害者のためにもっとたくさん商品があると望ましい（ドイツ・ハンブルク）
- ・子供のための製品に興味がある（ドイツ）
- ・体に不自由があっても、なくても使えることがで

きる商品はすばらしい（ドイツ・レバークーゼン）
・リサイクルできるような環境に配慮された製品も大切ではないか（ドイツ・エスリンゲン）
・私はデザイナーとして、このような商品をデザインしたい（ドイツ・エスリンゲン）

4日間の展示を終え、約1500人に来場いただいた。昨年度と比べて約3倍と大盛況であった。嬉しいことに、昨年度も本ブースを訪れた方々が、今年も足を運んでくださり、「共用品の考え方には本当に共感する」、「来年も是非ブースを出してください」、「この活動をドイツでも広めてください」などとコメントをいただいた。

まだ2年目であるが、継続することによって得られる関係もあり、地道ではあるが、国際的に友好的に連携をとっていける団体や個人との出会いが多くあったことも出展の成果であったと思う。

展示した共用品の配慮や製品への問い合わせも多く、興味を持ってくださった人たちと、製造・販売元である日本企業とをつなぐ役割が果たせたことは、今後の共用品・共用サービス普及活動に大いに影響してくると思われる。

もりかみお (森川美和)

ベテル～障害のある人々に寄り添う町～を訪ねて 1人ひとりの能力引き出す創意工夫と「個性の保証」

REHA展の閉幕後、デュッセルドルフから北東へ200km、北ドイツ・ビーレフェルト（Bielefeld）市にある「ベテル（Bethel）」を訪れる機会に恵まれた。「デュッセルドルフへ行くなら、ベテルへ行ってみるとよい」という星川安之事務局長からの助言を得て、ベテルで長年重度障害者の作業療法に携わってきたヒュステベック節子さんに連絡を取ったところ、ご案内いただけることになったのは幸運だった。

人口の50%、3500人が障害者

ベテルとは、ヘブライ語で「神の家」という意味。1867年にドイツ・ルーテル教会関係者が1軒の

農家を買取り、6人のてんかんの少年を保護したのがこの町の始まりである。



■ベテルで民間人がてんかん患者のケアを始めた記念碑的な施設



■同じ絵を合わせる教材で訓練する患者さん

現在のベテルは、ビーレフェルト市の一地域となっていて、東西2.5km、南北1.5kmのなだらかな丘陵地帯に、てんかん治療では世界最先端の専門病院、総合病院や老人ホームなどを含む600棟以上の建物が点在する。

人口約1万7000人のうち、約3500人が障害者という町である。ベテルにいる障害者は、主にてんかんと精神障害、これらの重複障害のある人が多い。ほかには知的障害、アルコール・薬物依存症などであり、障害の程度はさまざまで、年齢層も子供から高齢者まで幅広い。

私たち（森川と山本）はそれら点在する施設の中から、ヒュウステベックさんが以前作業療法の指導をされていた2カ所の作業所とホーム、幼稚園などを見学させていただいた。

作業所では、25歳～65歳くらいまでのてんかんや精神障害の人たちが、隣接のホームまたは町から通所し、ドイツ国内メーカー向けの簡単な部品の組み立て作業、古切手の選別、木工製品の製造など、遊びやゲームなどを併用しながらの作業療法を受けていた。

「重度障害者も役割を果たし、社会に貢献」

印象的だったのは、職員の創意工夫によって生み出されたさまざまな玩具や道具である。一人ひとりの障害者の身体能力を見極め、カスタムメイドされた玩具や道具が、障害者の見えない能力を引き出し、小さな働きを支えている。

また、作業所に隣接するホームも、日本では考え



■幼稚園で保育を受ける重複障害のある男の子。右端は事務局・森川美和さん

られないほどゆったりとした空間に、すべての人に個室が用意されており、プライバシーにも十分配慮されている。

リヒトブリック幼稚園は、4カ月～6歳まで30人の園児の中に、てんかん、発達障害、情緒障害などの子供4人を受け入れている。最初はダウン症児の母親からの要望で始まった取り組みは、今では職員が障害児をマンツーマンで指導できるよう、外部のさまざまな専門家や行政からの技術・経済面での支援を受けながら運営されている。

「どんな重度の障害者でも小さな役割を通じて社会に貢献し、個人の個性、空間、時間を保証されるべきだ」とするベテルの基本的な障害者対応は、真のノーマライゼーションの実践にほかならないと感じた。

やまもと 美和
(山本 修)

■Bethelホームページ <http://www.bethel.de/>



■広くて快適なホームの個室

進む日中韓3カ国の連携

東京で「第3回東北亜標準化協力セミナー」を開催 協力体制強化に向け「覚書」締結

3年前から、ソウル、北京で毎年開かれてきた「東北亜標準化協力セミナー」の第3回会合が、昨年12月13、14の両日、東京・赤坂の都市センターホテルで開催された。このセミナーは韓国の発案で始まったもので、日本、中国、韓国の3カ国がアクセシブルデザインの標準に関する情報交換を行い、かつ、共同のテーマを見つけて国際提案していくことが目的である。

初日の13日午前は、日中韓それぞれの国から標準化に関する自国の状況を報告し合い、午後からは昨年までに日中韓の共同テーマとして採択された委員会などからの中間報告が行われた。

北京五輪に向け、「公共情報図形」の標準化を検討

報告のトップバッターは、「中日韓アクセシブルデザイン委員会」。議長を仰せつかっている星川がこの1年の進捗状況を説明した。昨年は日本側が韓国、中国を順次訪問し、第1回の会合を昨年9月北京で開催したが、その間の経過報告を行った。

日本からは「国際的な動向に見るCSRの現状」と題し、先に国際標準化機構（ISO）で決議された「企業の社会的責任（CSR）」に関する国際的な枠組み作りについても、3カ国の連携を提案した。

2008年に北京オリンピックの開催を予定している中国からは、「公共情報図形符号に関する3カ国協力」が提案され関心と呼んだ。本セミナー提案国である韓国からは、輸送時に使用する「パレット」に関する標準化の動きの報告と共に、本セミナーの今後の運用に関しての提案などがあった。

最終日に作成された「覚書（レゾリューション）」には、「中日韓アクセシブルデザイン委員会」がうまく進捗していること、今後も3カ国で協力し推進することが確認される文章が掲載された。

なお、次の第4回東北亜標準化協力セミナーは、ソウルで開催されることも決まり、有意義な会合は

幕を閉じた。

ソウルでUD展示会&シンポジウム開催

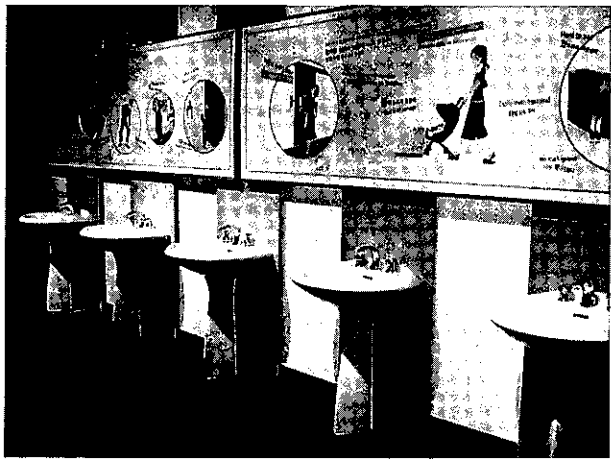
これに先立って、昨年11月12日から1カ月間、ソウル市内にある「ソウル・デザイン・ミュージアム」において、「ユニバーサルデザイン展」が開催された。財共用品推進機構もこれに招かれ、日本製の共用品が数多く会場に並び、来場した多くの人たちから多大な関心が寄せられた。

同ミュージアムでは、年間8～9の異なるテーマ展示会を行い、今までにも数多くの新しい「デザイン」コンセプトを韓国内に定着させる原動力になっている。オープニングの3日間は、日米欧から招かれた関係者が各国の共用品・ユニバーサルデザイン（UD）の現状を伝え合うシンポジウムとワークショップも開催された。

今回の展示会、シンポジウムの企画・運営を担当した韓国の関係者が、機構事務所を訪ねてきたのは昨年の9月、すでに展示会のオープニングまで2カ月を切った時点であった。一行は、韓国でのUD普及を中心に担っているヨンセイ大学のリ・ヨンスク教授、日本に留学経験もあり日本語が流暢な同大学のチェ・リョン氏、そして、同ミュージアムのパン・ヨンスクさんであった。パンさんは今回の展示



■ソウルで開かれた韓国UD展示会の会場



■気づきのための「異なる動作で水やお湯が出る蛇口」

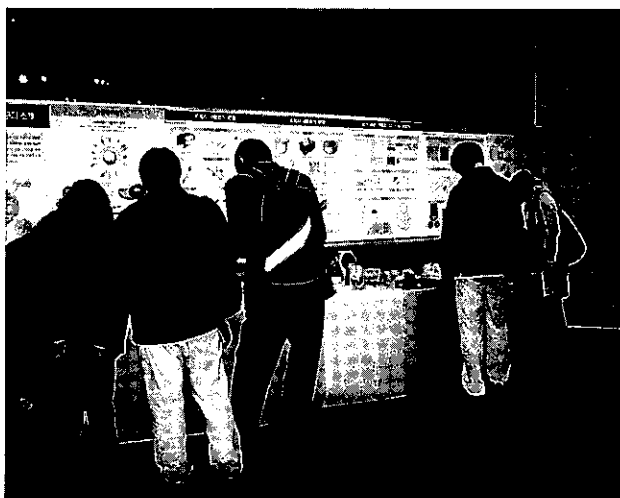
会、シンポジウムの企画・準備・施工・運営管理を中心に行った30代前半の女性である。

3人はとても熱心に当機構の活動の話に耳を傾けてくださり、その場で「日本の共用品を展示したい。是非、力になってほしい！」との嬉しい申し出をいただいた。

それからわずか2カ月。ご招待を受けて展示会場を訪れてみると、見事に、心のこもった韓国と日本を橋渡しする展示会ができあがっていた。

「気づき」訴える巧みな演出、共用品も一役

会場に入ると、まず、「ふるしき」が1つのコミュニケーションの道具であった昔の韓国と、携帯電話でのコミュニケーションが主流の今の韓国とを、プロの人形作家の作った約20体の人形がさまざまな表情で問いかけてくる。



■日本の共用品コーナーにも多数の来場者が訪れた

次のコーナーは、数百の韓国の茶の間の写真。すべての写真の中央には、「テレビ」が主役でドンと居座っている。次はいす。体型の異なる人たちにも、障害のある人にも「同じいす」しか用意されていない状況だ。しかも、車いす使用者を拒否するかのよう、膝が入らないテーブルの存在に来場者は気づかされる。

そこまでの「20世紀」の展示である。続いて、「21世紀」に入るとすぐに、高さの異なる「取っ手」がたくさん付いた扉、異なる動作で水やお湯が出る蛇口があり、「気づく」こと、「考える」ことを来場者に提案している。

最後のコーナーでは、障害のある人たちと一緒に考えた多数のモノが、分野別に並んでいる。その先頭バッテリーが「共用品」。側面にギザギザの付いたシャンプー容器、上部に点字表示の付いた缶入りアルコール飲料。この2つに関しては、韓国製品と日本製品が同じルールで成り立っていることも紹介されていた。

金沢美術工芸大学のコーナーでは、荒井利春教授が指導し、障害のある人のニーズを開き、確認しながら作っていった「はさみ」や「包丁」の開発過程が、誰にでもわかりやすく展示されていた。個人的な話で恐縮だが、荒井さんとは、彼が障害児用のいすを1脚1脚手作りして制作していた「でく工房」に在籍していた頃からの知り合いである。今回、久しぶりに、しかもソウルで再会することとなり、懐かしくも、嬉しいひと時を過ごすことができた。



■昔と今のコミュニケーションを象徴的に表した約20体の人形たち

第6回西日本国際福祉機器展に出展 共用品九州と協力して クイズ形式でアンケート

(財)共用品推進機構は、11月12～14日の3日間、北九州市小倉にある北九州市西日本総合展示場で開催された「第6回西日本国際福祉機器展」に出展した。

主催者側の発表によると、入場者数は前年をわずかに上回る3万8023人。特に今年はユニバーサルデザイン(UD)に配慮された福祉車輛や車いすなどに、来場者の注目が集まった。来場者の傾向としては、ビジネスでの来場よりも介護サービス関連の方や高齢者が多く、福祉を学ぶ学生、学校の先生なども見受けられた。

当機構ブースには、説明パネル、製品見本44点、11点の不便さ報告書、関連書籍と共に、今年は「共用品九州」(事務局長：釜本幸喜子氏)の活動内容と学生による共用品アイデアのパネル展示も行った。

恒例の共用品製品展示は今回も好評で、製品を1つ1つ手に取りながら、機能を確認したり、企業の連絡先をメモされたりする方が多かった。障害者や高齢者の不便さ報告書、「共用品白書」

さらには、福祉機器を多数常設展示している大阪の「ATCエイジレスセンター」や、トライポット・デザインの中川聡さん、トヨタ自動車「メガウェブ」が協力したコーナーも見ごたえがあった。その他、北欧、アメリカなどからも多数の出展があり、内容の濃い展示会であった。

日・韓・欧米12カ国が現状を報告

初日に開催されたシンポジウムでは、スウェーデン、アメリカ、スイス、韓国、日本から12人の発表者がそれぞれの分野からの報告を行った。共用品推進機構は活動内容と共に、実際の共用品をスライドで紹介、大きな関心が寄せられた。

2日目、3日目のワークショップでは、2時間ずつをかけて2回、韓国の学生、社会人、学校の先生それぞれ100人ほどの方々に、共用品の生まれた背

への関心が高かったのも今年の特徴である。東京ビッグサイトの国際福祉機器展と同様に、展示会終了後には、事務局に資料購入の問い合わせが多数寄せられた。

また今回は、ブースに来場された方の関心を探るため、共用品九州メンバーによるクイズ形式のアンケート調査も実施した。その結果、一般の人だけでなく、視覚障害者の中にも、シャンプーのギザギザやカードの切り欠きを知らない人がいることがわかった。

配慮点のある製品が増えてきているものの、まだまだ認知度が低いことが裏付けられる結果となった。機構ではこの結果も踏まえ、今後ますます共用品・共用サービスの普及促進に力を注いでいきたいと考えている。

(山本 修)

景、障害のある人たちの不便さ、共用品の配慮点を話したところ、とても熱心に聞いてくださり、大変話しやすかったという印象が残っている。

日本に帰国後、1カ月の展示会が終了したこと、連日1000人近い人たちが来場したことなどの報告の電話をもらった。また、ヨンセイ大学のリ・ヨンスク教授からは「共用品推進機構と今後も連携し、韓国でももっともこの活動を盛んにしていきたい」というメールをいただいた。

ところで、冒頭のパンさんである。「なぜ韓国ではこんなにも短期間でこの規模の展示会ができるのか？」と聞いてみた。開催直前の最後の数日は一睡もしていないパンさんではあったが、「これが普通です」との答えが笑顔で戻ってきた。また、大きな元気をもらったところである。

(星川安之)

「情報の橋渡し」を公共サインに託して

こやまけいいち
見山啓一 (財共用品推進機構個人賛助会員、(株)アイ・デザイン代表取締役)

私の仕事は、駅や空港の公共サイン計画です。サインといえば、まず思い当たるのがトイレ誘導サイン。間違いなく今までに何回も、いや何百回も皆さんのお役に立っているはず。これらの公共のサインは、障害のある人もない人も、お年寄りも外国人も含め、あらゆる人に等しく情報を提供する必要があります。

サインは共用品？

サインによる情報伝達は、人の感覚のうち、主に視覚に頼ります。では、サインは共用品といえないのでしょうか？

実はたった1つのサインの中にも、日本語、英語、矢印、ピクトグラム、そして色彩と、5種類もの情報が含まれています。つまり、日本語が読めない人には英語、文字がわからなかったり遠くから見えない場合にはピクト、そして特に意識しなくても何となく頼りになる色彩と、バリアをなくすために複数の情報提供がされているわけで、これはもう立派な共用品だと思います。

とは言うものの、視覚だけに頼っていたのでは、共用品であるべき公共サインとしてはまだ不十分で、このことが、視覚デザイン中心に仕事を進めてきた私にとって、大きな悩みでした。

以前、共用品ネットの当時の視覚情報障害班が池袋駅のサインを調査したことがありました。ご存じのように、池袋駅はJR、東京メトロをはじめ、たくさんの交通機関が集まるターミナルで、それに百貨店なども加わり、実にさまざまなサインが設置されています。その中でどこのサインが見やすく、わかりやすいかを調査したのです。

30年前の自作のサインとの「再会」

選ばれた写真を見て、あっと驚きました。なんとその中に、約30年前、私が入社してまもなくデザインした西武池袋駅改札口付近にある「電話コーナー」のサインが入っていたからです。それはデザインと

いうよりも、ただ単にダークブルーの地に白い文字で「電話コーナー」と書いてあるだけのものですが、なぜ見やすいサインに選ばれたのかを考えてみると、思いあたるものが1つありました。

当時はコンピューターはもとより、拡大縮小できるコピー機もありません。従ってデザインは、トレースコープという、公衆電話ボックスほどもある大きな機械でガラス面に写る拡大文字をトレーシングペーパーに写し、さらに定規を使って一文字ずつ原寸で描いていく手作業でした。そのため、文字の大きさのバランスや文字詰めが、すべて自動的に行われるコンピューターに比べて整っており、このことが見やすさへの配慮につながったのではないかと思います。ここで改めて、他の方法に頼らなくても、1つの機能を高めることで、1人でも多くの人に役立つ共用品になることに気付き、今までの悩みがふっと消えました。

1人でも多くの人に情報を伝えるために

人は常にものごとを複数の感覚で捉えています。従って情報を伝える場合は、障害の有無にかかわらず、1つの感覚に頼るより複数が望ましいので、視覚、聴覚、触覚に限らず、嗅覚や味覚も含め、総合的に考える必要があります。

人とモノとの関係で言えば、それぞれがもともと備えている感覚を大事にして、何を伝えるべきかを推理し、見えないものを見えるようにすること、どうしてよいかわからないものをわかるようにする「情報の橋渡し」が、私の役割ではないかと思っています。そして、サインなど意識しなくても誰もが自然に行動でき、おまけにちょっと楽しくなるような世の中になるよう、仕事を続けていきたいと思っています。

なかのなつみ
(題字は、中野奈津美・財共用品推進機構運営委員)



第2回ADFシンポジウム開催 高齢者・障害者への配慮施策の現状と今後

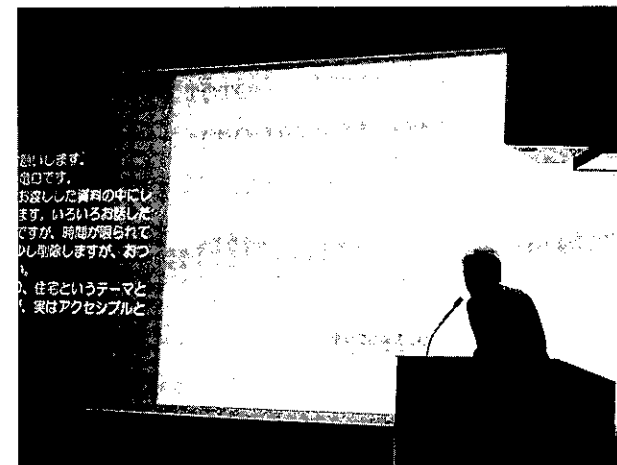
(財)共用品推進機構、(財)日本規格協会など7団体が主催する「第2回アクセシブルデザインフォーラム(ADF)・シンポジウム」が昨年11月24日、東京・丸の内東京商工会議所大ホールで開催された。今回は「日本の高齢者・障害のある人達への配慮施策の現状と今後～新しい社会のルール作りを目指して～」をテーマに、前回に引き続いて「ISO/IECガイド71」策定の議長役を務めた菊地真・防衛医科大学教授をコーディネーターに迎え、住宅、交通、情報、製品、行政の5つの分野ごとに、企業や専門機関の代表が取り組み状況について発表した。その主な内容は以下のとおりである。

<住宅>TOTO

ユーザー評価・行動観察・検証が製品開発の要諦

発表者はTOTOユニバーサルデザイン(UD)研究所長の竜口隆三氏で、温水洗浄便座を発売した1970年以降の開発体制の経緯について説明した。

会社では、トイレを「誰もが毎日必ず使うもの」との基本認識に立ち、①姿勢・動作が楽、②わかりやすく簡単な操作、③使用者の違い・変化に対応、④快適、⑤安全——の5原則を定め、より使いやすい製品作りを推進している。UD開発のポイントとして①ユーザー視点での評価、②ユーザーの普段の行動観察、③事後検証の実施——を指摘。高齢者への配慮では、①段差の解消、②手すりの設置、③座る姿勢への配慮——が基本と述べた。また、今後の課題として「公共トイレの標準化」を挙げた。



発表するTOTOの竜口隆三UD研究所長

<交通>東急車輛

みなとみらい線での鉄道車輛のUD化

東急車輛車輛設計部・平井俊江氏が昨年2月に新線開業した横浜市の「みなとみらい線」のY500系車輛における配慮設計について紹介した。新型車輛では、①15インチの液晶ディスプレイを各ドア上部に2台ずつ設置、②触覚記号と点字による「車内乗車位置表示」を設置、③背の高い人も低い人も一緒に使えるよう、低めのつり革を装着、④車いすスペースなど各車輛4台の非常通報装置を設置——などの利用者への配慮設備を採用している。

また、同社は鉄道総研と共同で「鉄道車輛UD7原則」を策定し、今後は定量的評価を行う予定としている。

<情報>マイクロソフト

情報アクセシビリティは最優先事項

マイクロソフト業務執行役員東貴彦氏が情報アクセシビリティの現状を説明。「アクセシビリティの実現は最優先課題」という理念が、ビル・ゲイツ氏以下の全社に浸透していると語った。そのうえで、連邦政府が調達するIT機器のUD化を義務付けた米国リハビリテーション法508条に対応して、アクセシビリティを検証する共通ツールである「VPAT」をIBM、ヒューレット・パカード、ユニシスなど大手ITベンダーとともに確立したことなど、取り組みの現状を紹介した。

また、わかりやすいウェブサイトの作り方として、①画像へのALTタグによる説明文の付与、②一貫性のあるナビゲーション、③適切なページタイトル——などの基本を解説した。

このほか、(財)家電製品協会UD技術関連ワーキンググループの森田晴義氏(三洋デザインセンター開発部)が、家電製品における高齢者・障害者配慮への取り組みや配慮設計JISなどについて発表。最後に、経済産業省産業技術環境局標準企画室長の横田真氏が、国際標準化機構(ISO)でのアクセシブルデザインの推進状況、日本の産業政策における取り組みについて報告した。(高嶋健夫)

今年度「バリアフリー化推進功労者」を決定
オリエンタルランド、イトーヨーカ堂など10件

内閣府はこのほど、「平成16年度バリアフリー化推進功労者表彰」の受賞者を決定した。内閣総理大臣表彰は2つの地方自治体、内閣官房長官表彰は個人、ボランティア団体、企業、独立行政法人など8件で多彩な顔ぶれとなっている。

この表彰は、障害者や高齢者を含むすべての人が安全で快適に暮らせる社会作りを推進するため、顕著な功績のあった個人や団体を顕彰し、その優れた取り組み事例を広く普及させる目的で始まった5年間の次元表彰制度で、今年度が3回目となる。財共用品推進機構は初年度の平成14年度に内閣官房長官表彰を受けている。

今年度表彰者の概要は以下のとおり。

【**湖南省**】障害のある子供に対する、就学前から就労に至るまでの一貫した総合支援システムを全国の自治体に先駆けて構築。

【**南砺市**】地域住民情報を掲載したポータルサイトを立ち上げ、各種IT機器を活用した地域コミュニティネットワークを形成。その企画・運用はボランティアなど地域住民が中心的に担っている。

【**荒由利子氏**】高校の教員として30年以上にわたり、生徒や地域住民を巻き込んだバリアフリー推進活動に取り組んできた。

【**伊予鉄道**】松山駅の改築に伴うバリアフリー化、超低床路面電車の導入などに取り組む。

【**イトーヨーカ堂**】店舗のバリアフリー化と併せて、障害のある顧客への従業員の接客研修などソフト面での対応にも尽力。

【**オリエンタルランド**】「すべてのゲストがVIP」の理念で東京ディズニーリゾート（TDR）のバリアフリー化をハード、ソフト両面から推進。

【**高齢者住宅環境整備ボランティア会**】大分県日田市の建築関連業者で組織するグループで、地域の高齢者世帯を対象に材料費程度の負担でバリアフリー改修を実施している。

【**仙台シニアネットワーククラブ**】高齢者がインストラク

■平成16年度バリアフリー化推進功労者表彰の受賞者一覧（五十音順、カッコ内は推薦者）

- 【内閣総理大臣表彰（2件）】
 - ・湖南省（滋賀県）（文部科学省推薦）
 - ・南砺市（富山県）（富山県推薦）
- 【内閣官房長官表彰（8件）】
 - ・荒由利子氏（福島県推薦）
 - ・伊予鉄道（愛媛県推薦）
 - ・イトーヨーカ堂（内閣府推薦）
 - ・オリエンタルランド（千葉県推薦）
 - ・高齢者住宅環境整備ボランティア会（大分県推薦）
 - ・仙台シニアネットワーククラブ（仙台市推薦）
 - ・独立行政法人鉄道建設・運輸施設整備支援機構、九州旅客鉄道（熊本県推薦）
 - ・トヨタ自動車（経済産業省推薦）

ターになり、地域の高齢者や小学生向けにパソコン教室を開催。

【**鉄道建設・運輸施設整備支援機構、九州旅客鉄道**】

九州新幹線の暫定開業に伴い、新型車両「つばめ」、駅舎、在来線との乗り継ぎホーム・同システムなど総合的にバリアフリー化を実施。

【**トヨタ自動車**】ユニバーサルデザイン評価指標を

独自開発し、新型車の開発時に採用。また、UDをテーマにした大規模展示場を開設、普及に尽力。

表彰式に合わせ、企業シンポジウムを開催

表彰式は昨年12月9日の「障害者の日」に東京の有楽町朝日ホールで開催された内閣府主催の「共生社会における企業と障害者」シンポジウムに先立って行われた。

なお、このシンポジウムでは、昨年度バリアフリー化推進功労者表彰を受けた京成ホテルをはじめ、資生堂、オムロン、小田急電鉄、イトーヨーカ堂の5社による事例発表と討論が行われた。また、それに先立つ基調報告として、共用品推進機構の星川安之専務理事が「障害者の不便さについて」と題する発表を行った。
（高嶋健夫）

『さわってわかる歯みがきの本』を発行
大日本印刷と共同制作、盲学校などに配布

ライオンは指でなぞれる「触図」と点字が付いた『さわってわかる歯みがきの本』=写真=を発行した。“ユニバーサルデザイン健康読本”と称して大日本印刷と共同で企画・制作したもので、墨字の文章は点字に、イラストは触図にすることで、視覚障害のある子供でも楽しく、わかりやすく歯みがきの方法を学ぶことができるようになっている。

この本は2分冊になっており、共にB5変形判・本文10ページ。歯の手入れ方法に関する情報をわかりやすく紹介、第1巻では「歯の機能や歯のはえかわり時期」や「むし歯や歯周病の進み方」など基本的な情報を、第2巻では「歯のお手入れ方法」など毎日の生活に役立つ情報をまとめている。内容は財ライオン歯科衛生研究所が監修した。

点字印刷は、インクを立体に盛り上げる特殊技術を活用したシルクスクリーン印刷で行い、インクには紫外線で硬化する透明樹脂を使用しているため、通常の印刷文字に影響を与えないという。また、点字、触図のほか、墨字についても拡大文字を使用し、



色は見やすいようにメリハリのある配色にしたとしている。

ライオンではこの本を全国の盲学校、点字図書館、リハビリテーション施設などに無料で配布したほか、ライオン歯科衛生研究所が1994年から実施している「視覚に障害を持つ方を対象とした歯のお手入れ講習会」でも活用していく。希望者は下記のお客相談室まで申し込み、無料で提供してくれる。

■問い合わせ先：ライオン(株)お客相談室（担当：平塚氏）TEL 03-3621-6611 FAX 03-3621-6269
ホームページ<http://www.lion.co.jp/>

2004年版福祉車両ガイドブックを発行
全面カラー化、内容も大幅に刷新

（社）日本自動車工業会（自工会）はこのほど、福祉車両に関するさまざまな情報を掲載した『福祉車両早わかりガイドブック ともに道をひらく』2004年版=写真=を発行した。

福祉車両への理解を深めてもらう目的で1997年から毎年発行している冊子だが、この間、社会の高齢化の進展に伴い、福祉車両の販売台数も96年度の約9000台から、2003年度には4万2871台へと5倍近い伸びを示している。こうした福祉車両へのニーズや関心の高まりを受けて、2004年版では内容を大幅にリニューアルした。

福祉車両の種類や年度別の販売台数の推移、購入

時に受けられる助成措置や税制上の優遇措置の解説など、従来の内容を更新すると共に、アメリカ、イギリス、スウェーデンにおける福祉車両の状況レポートなども新たに掲載されている。A4判・オールカラー32ページ。

なお、同冊子の内容は、自工会ホームページ（<http://www.jama.or.jp/>）でも閲覧できる。

（高嶋健夫）



「数字で見るバリアフリー（第1回：0～9）」

後藤芳一（共用品推進機構運営委員、日本福祉大学客員教授）

共用品^{③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩}の基本的なことは、鍵になる数字を通じて、押さえることができる（小さい添え字^{①-⑩}は、同様の用語が本講の第1～32講に既出であることを示す）。

0. 「グレーの部分」は“0”の発見

昔、インドで発見された“0”の概念は、その後の数学を大きく発展させた。共用品推進機構^{①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩}の前身であるE&Cプロジェクト^{⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲}の、さらにその前身にあたるRIDグループ^{⑳㉑㉒}は1982年に、障害のある人となない人の中間領域である「グレーの部分」^㉓に注目し、双方が同じ日常生活用品を使えるのではないかと提案した。それが、後の共用品につながった。新しい概念を編み出し、鮮やかに説明した点で、共用品における“0”の発見、と言える。

1. 「朝子さんの1日」

不便さ調査^{㉔㉕㉖}などをもとに、主婦“朝子さん”の1日を通じて、視覚障害者^{㉗㉘㉙㉚㉛}の生活を伝えた絵本。E&Cプロジェクトが企画・制作し、1993年10月に小学館から刊行された。

2. 「共用品の市場は2兆円」

共用品の2002年度の市場規模^{㉜㉝㉞㉟}は、2兆3413億円（前年比5.6%増）に達している。

3. 「日中韓3カ国から、国際規格をめざす」

2004年9月に「第1回中日韓アクセシブルデザイン^{㉟㊱㊲}委員会」が開かれた。アジアの3カ国が共同で国際提案し、多くの関連国際規格^{㊳㊴㊵㊶㊷}の策定をめざす。

4. 「4つの配慮区分」

共用品の「5つの原則」（次項参照）は、それをさらに具体化して、Ⅰ. わかりやすさ、Ⅱ. アプローチしやすさ、Ⅲ. 扱いやすさ、Ⅳ. その他——の4つの「配慮区分」に分類されている。

5. 「5つの原則」

2000年に、共用品推進機構は「『共用品・共用サービス』の新定義と5つの原則」^{㊸㊹㊺㊻㊼}を制定した。旧「5つの基準」^{㊽㊾}は、E&Cプロジェクトが1993年に制定した。ちなみに、「5の上の凸」^㊿は、この分野の古典である。

6. 「6区分-共用品からみた製品の分類と定義」

共用品の周辺の製品は、Ⅰ. 専用福祉用具、Ⅱ. 共用福祉用具、Ⅲ. 共用設計製品、Ⅳ. バリア解消製品、Ⅴ. ユースフル製品、Ⅵ. 健常者専用製品——の6つに区分されている。Ⅱ～Ⅴが「共用品」と定義され、市場規模（「2」の項を参照）は、この定義に基づいて算出されている。

7. 「7つの考慮ポイント」

2001年に発効した「規格作成における高齢者・障害者のニーズへの配慮ガイドライン（ISO/IECガイド71^{㊾㊿㊱㊲㊳㊴㊵}）」は、①情報表示、②注意表示、警告、③包装・容器、④素材（材質）、⑤取付け、⑥ユーザー・インタフェース（扱いやすさ、操作スイッチ、フィードバック）、⑦整備、保管、廃棄、⑧構築環境（建物等）——の7つの考慮ポイントを、マトリクスで示している。1990年頃には、米国でユニバーサルデザイン^{㊿㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹}の「7つの原則」が提唱された。

8. 「共用パッケージ、8つのキーワード」

包装・容器^{㊿㊱㊲}の規格である「JIS S0021高齢者・障害者配慮設計指針—包装・容器」は、①識別、②開封、③取り出し、④持つ、⑤再封、⑥計量、⑦捨てる、⑧けがをしない——という8つのキーワードを示している。

9. 「バリアフリー化推進 官房長官表彰9団体」

2002年に新設された「バリアフリー化推進功労者表彰」^㊿の初回の表彰で、総理大臣表彰が2団体、官房長官表彰が共用品推進機構を含む9団体に授与された。

真の「キャッチャー」であるために 博物館ツアーで巡り会った「プロの仕事」

☆……毎日を、初日のような気持ちで迎えられることに感謝しながら、新たな年をまた迎えている。

小学生の頃から、野球をすると決まってキャッチャーをやらされるはめになっていた。けれども、中学の時、サリンジャーの「ライ麦畑でつかまえて」を読んで、その英文の題名に「キャッチャー」という単語を発見し、実は密かに自分の守備位置を誇らしく思ったりしたものだ。

昨年も実に多くの出来事に巡り会うことができた。その中には、今年3月から半年間、愛知県で開催される「愛・地球博」の日本政府館における「バリアフリーサービス」のマニュアルを作る仕事がある。

☆……その仕事の一環で先日、都内のある博物館にうかがった。そこで、来場者にガイドツアーを行っているボランティアの女性による「プロの仕事」に出会うことができた。その方は、普段はフランス語でのガイド

を担当している。

私たちは事前に「目の不自由な人へのガイドツアー」の予約をとったところ、担当となったその人は「どうすれば目の不自由な人に、この博物館の面白さ、深さを正確に伝えられるか」を考えた。そして当日、彼女は展示品の屏風の前に来た時、おもむろに鞆の中から前夜作ったという「屏風の模型」を取り出し、私たちの仲間に手で触らせ、端から順に何が描かれているかを説明した。さらに、屏風の実際の大きさを知らせるために、目の不自由な人と一緒に歩き、歩幅で大きさを確認してもらう方法も考え出した。

この博物館には、直接触れる展示品は多くはない。その数少ない「触れる展示品」である梯子に来た時には、「手を失礼します」のさりげない言葉と共に、自分の手を下から添えて展示物まで誘導する。その一連の動作は、これ以上ないスムーズさ。

星川 安之



事務局 だより

後で、導かれた側の感想を聞くと、「手を触れられている気がしないほど自然でした」。

☆……ツアーが終わって、彼女に「よりよいガイドツアーとは？」と質問した。「来場者、ツアーガイド、そして運営サイドが三位一体になって初めて、より高い満足がそれぞれの中に生まれてくるのだと思います」と、ガイドしている時と同じように、笑顔で話してくれた。

彼女はまさにプロの「キャッチャー」である。そして、そんなプロの仕事を目の当たりにすることができる今の自分を、なんと得な役回りだろうと改めて思った。今年も「キャッチャー」でありたいと願い、また新たな「キャッチャー」たちと巡り会うことを楽しみにしている。

(★)

共用品通信

【お知らせ】

○『最新版共用品リスト』をHPにアップ
機構ホームページ (<http://kyoyohin.org/>) に『最新版共用品リスト』をデータアップした。『共用品白書』に掲載した共用品を、「情報提供」「容器・包装」「製品」「施設・設備機器」「サービス」の5つのカテゴリーで検索できるように分類している。

【委員会】

○第3回点字表示方法における標準化に関するWG（11月22日）
○第3回不便さ調査委員会（11月25日）
○第3回触知図表記方法における標準化に関する検討小委員会（11月29日）
○第3回アジア標準化委員会（12月3日）

【展示会】

○第3回しずおかユニバーサルデザイン大会/浜松市（12月17～19日）

【講演】

○国立特殊教育総合研究所（11月2日、星川・森川）
○日本広報学会 シンポジウム（11月27日、星川）
○府中第一中学校で共用品について講演（11月30日、東芝デザインセンター・森川）
○東京都社会福祉総合学院公開講座（12月4日＝凌、12月11日＝花島弘理事）
○綾瀬市バリアフリー講演会（12月13日、凌）

【来訪・来所】

○JICA研修生（11月16日）
○平成帝京大学学生が展示室見学（11月19日）

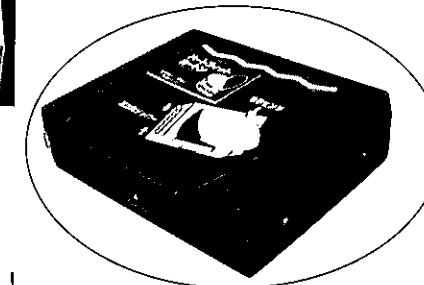
【報道・マスメディア】

○『キク！みる！』（フジテレビ）（12月3日）
政府の重要施策や取り組みなどをテーマに、関連する場所や人物を紹介する番組『キク！みる！』に、機構・凌竜也さんが出演し、共用品を紹介した。

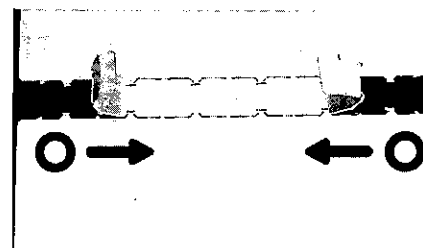


大日本印刷「ハートフィット・カートン」シリーズ 開封しやすく、使いやすいUDパッケージ

■どっちもオープン



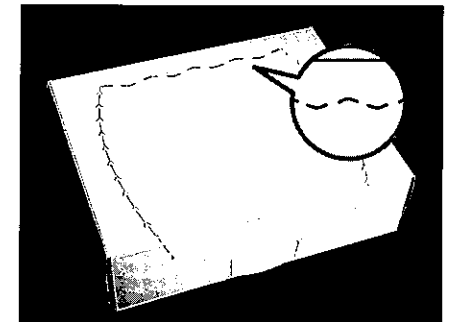
■どっちもオープン(拡大)



※開封体験用サンプルカートン

▽問い合わせ先：大日本印刷(株)
包装総合開発センター 事業企画推進室 企画情報支援チーム
(TEL：03-5225-5948)

■S字ヒンジ (開封前)



■S字ヒンジ (開封後)



双方向ジッパー、S字ヒンジなど独自の工夫

大日本印刷が開発した「ハートフィット・カートン」シリーズは、「開けやすさ・使いやすさ」を徹底的に追求した新世代のパッケージである。

写真左側の「どっちもオープン」はその名のとおり、左右どちらからでも開封できる双方向ジッパーだ。

お菓子の箱などに使われる既存のジッパーは片側からのみ開封できるようになっているため、反対から無理に引っ張ったりすると、途中でち

ぎれたりしてしまう。「どっちもオープン」はそんな不便さを解消、飲料ギフトの箱などで採用されている。

写真右側の「S字ヒンジ」は、開けたフタが戻ろうとする復元力を弱め、開けた状態を保つことができるようにしたのが売り物。従来のパッケージでは折り罫が直線状に入っていたが、これをS字状のミシン目することで折り部の反発を押さえることに成功した。

お菓子の箱を開けた後、自然にフタが閉まりかけて、中身を取り出すのに面倒な思いをしたことはないだろうか。そんなイライラをなくしてくれるストレスフリーの新機構として、ビスケットやチョコ、キッチンペーパーなどに採用されている。

同シリーズには他に、ジッパーの先端を幅広にして指のかかりを良くした「つまみ上手」、箱をひねるだけで開封できる「ツイストオープン」、薄い箱でも快適に開く「パリット開封」などがある。

(高嶋健夫)

作る人と使う人の共用品情報誌

インクル 第34号

2005 (平成17) 年1月25日発行
"Incl." vol.6 no.34

©The Accessible Design Foundation of Japan
(The Kyoyo-Hin Foundation), 2005

隔月刊、奇数月に発行
一般頒価 1部1000円
(但し、個人・法人賛助会員については、購読料は年会費の中に含まれています)

※視覚に障害のある方など、墨字版がご利用できない方にはTXTファイルのフロッピーディスクを提供しています。必要のある方は、事務局までお申し出ください。

編集・発行 (財)共用品推進機構
郵便番号 101-0064
東京都千代田区猿樂町2-5-4 OGAビル2F
電話：03-5280-0020
ファクス：03-5280-2373

Eメール：jimukyoku@kyoyohin.org
ホームページURL：http://kyoyohin.org/

発行人 鴨志田厚子
事務局 星川 安之

森川 美和
凌 竜也
山本 修
金丸 淳子
布橋 智
天野 来未

編集長 高嶋 健夫

執筆・協力 後藤 芳一
(五十音順) 児山 啓一
牧内 智子
山本百合子
印刷・製本 ベスト・イーグル(株)/三栄印刷

本誌の全部または一部を視覚障害者やこのままの形で利用できない方々のために、非営利の目的で点訳、音訳、拡大複写することを承認いたします。その場合は、財団法人共用品推進機構までご連絡ください。上記以外の目的で、無断で複写複製することは著作権者の権利侵害になります。